

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	唐澤 健太	指導教員 (主査)	春原 則子

論文題目	失語症を対象とする音韻機能検査法の開発
------	----------------------------

本文概要

本邦において、失語症のある方 (people with aphasia : PWA) の音韻機能を評価できる標準化検査はない。本研究の目的は、PWA の音韻機能を適切に評価できる検査法の開発および PWA への適用の分析とした。対象は 21~79 歳の右利き健常者 90 名と、脳血管障害に伴う失語症を発症した 42~72 歳の右利き PWA10 名である。課題はモーラの分解、有無判断、位置同定、結合、削除、逆唱、復唱とし、それぞれ実在語と非語を用いた。正答数と反応時間を分析し、検査の妥当性、信頼性を検討した。健常群ではいずれの課題とも 9 割以上の正答率であった。逆唱 (実在語)、復唱 (非語) では、若年群に比し高齢群にて成績が有意に低下していた ($p < .05$)。主成分分析において「音韻認識」「音韻操作」「音韻表出」の 3 因子が抽出された。PWA 群では半数以上の課題にて同年代健常群よりも成績が低下していた。正答率は逆唱 (非語) が一番低く、次いで、逆唱 (実在語)、削除 (非語) の順であった。約 3 割の課題にて反応時間が延長していた。本検査は、既報告で使用されてきた課題を用いたこと、失語症臨床において 30 年以上の経験を有する言語聴覚士 3 名が課題内容を適切と判断したことから、内容的妥当性が高いと判断された。また、クロンバック α 係数=0.757、再検査法では削除、逆唱、復唱 (非語) にてかなり高い相関が認められた ($p < .01$)。本検査法の妥当性、信頼性は高いと考えられた。健常群では正答率が高い一方で、PWA 群では成績の低下が認められたことから、本検査は PWA の音韻機能障害の検出に有用であると考えた。本検査は鑑別診断検査と併用して、対象者に適した項目を抜粋して実施することによって、PWA の音韻機能を詳細に分析することが可能であり、障害構造の把握、訓練内容の選択、訓練効果の判定、予後予測等においても有用であると考えられる。